
冷めたカレー

七人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷めたカレー

【Nコード】

N4669F

【作者名】

七人

【あらすじ】

ある二人の兄妹。そして、それぞれのカレーが織り成す。なぜか心が温かくなるほんわかストーリー。

私、坂上加奈子は現在、兄と二人暮らしだ。

簡単に言えば、美大に通うためにすでに上京していた兄のマンションに転がり込んだただなのだけど。

その日、私は文化祭用の作品に四苦八苦していた。

目の前にあるのは小さな子供ほどの、作りかけの鳥の木像。

どうにも終わりが見えて来ない。両手にミノと金槌を持ったまま机の前で立ち尽くす。ちなみに机には、設計図やら鉛筆やらがぶんながっている。

「やっぱ挑戦するんじゃないかった……」

元々私は小さい物を作るのが得意だった。

しかし「社会に出たら通用しないぞ」と我が荒山美術大学の重鎮、彫刻科教授の守山先生に言われ、ムキになった私は中型の作品にトライしてみた結果がこれだ。

二ヶ月かかってやっと鳥の全体像ができた程度。

言い訳するなら、まず先生を見返してやろうとディテールにこだわりすぎて、設計図を描くのが大幅に遅れた。そのせいで目ぼしい木材はあらかた持ってかれるハメになり、設計図が細かすぎたために全体像までこぎつけても容易の手が出せない状況に陥った。

ここまで来ると少しでも手元が狂っただけでアウトだ。自分の感性も当てにできない。自分で言うのもなんだが、この設計図はいいできた。なんとしても完成させたい。

「ふっ」

ため息を吐き、横から椅子を引き出してドカッと腰掛けた。

締め切りまで、残り一週間。早い奴はもう進級課題用の作品に取り掛かっているし、文化祭の作品はその下地になる。

幸い、彫刻科の出し物に重要な役割は与えられていないけど、早く終わらせて手伝いに行かないとさすがに悪い。

「今夜も徹夜かなあ……」

今日で徹夜三日目、そろそろ肌荒れが気になり出ししてくるが文句は言えない。明日朝一番に銭湯に行こう、と思いつつ椅子の背に体を預けてのけ反る。ゴクゴキツと背骨から気持ちのいい音がして「ん？」

私は逆さまになった世界であるものを見つけた。向かいの机に何か乗っている。

「ああ、そうだった」

椅子から立ち上がって、それを見下ろす。それは、ラップに包まれたカレーだった。友達が差し入れに持ってきたのを忘れていた。食堂の厨房を借りて作ったらしいそのカレーは明るい色をしていて、具はサイコロ状にカットされていた。食欲をそそる色合いに、私はすぐ側に置かれたプラスチックのスプーンを持ってラップを取り除く。

やはり冷めているため匂いはしなかった。一口食べて、やわらかい味が口いっぱいに広がった。恐らく誰でも食べられるように甘口になっているのだろう。

添えられた赤い福神漬けのカリコリとした食感も嬉しい。

だけど、と私はもう一口食べる。

「すりリンゴに生クリームにチョコレート、それに蜂蜜はやりすぎじゃないかな？」

口の中で味わい、吟味しながら感想を漏らす。まあ、疲れた体にはちょうどいいのであまり言ってやらないことにする。

椅子に座って本格的に食べ始めた私は、ふと思った。

カレーと言えば……。

「兄キは今頃何やってるんだらう？」

俺こと、坂上俊哉はヘトヘトになって自宅マンションに帰宅した。精肉工場で働いている俺は、仕事をミスった先輩につき合わされ今

まで残業をしていた。

「ただいまー」

と入って返事が返ってこないことに気づく。

「ああ、そっか美大だっけ」

しばらく大学に泊まる、ということのを聞かされていたのにスッカリ忘れていた。つか、もう三日いないのによく間違えるな俺は。

「じゃあ、アレしかないわけか……」

台所へ歩き、中に入るとコンロの上には洋食店で使われるようなでかい鍋があった。蓋を開けて中を見ると、鍋の三分の一ほどのところに固まってペースト状になったカレーがあった。お玉でかき回しすと、塊カレーと共にゴロツとしたルーに溶け始めた肉やジャガイモが顔を出す。

長い間大学にいるということ、あいつは長く保存が利くカレーを作り置きしていったが……正直、三日連続カレーはきつい。

文句は言えないけどな。

鍋に火をかけながら、

「最近はいいつに頼ってばっかだなあ」

と思う。春頃にいきなり転がり込んできたあいつが来るまで、会社で買った安い肉が生命線であったが、今では家に変えれば暖かい食事が待っている。

少なくとも、手の込んだ料理がテーブルに並べられていることは確かだ。

「あれで、口うるさくなければ文句なしなんだが……」

鍋の中をかき回しながら言った。

元々、ああいう道に進む奴らは変人ばっかだしな。高校時代の美大志望を友人を思い出し、苦笑する。

そうこうしている内に、塊カレーがとろとろカレーに変化した。まるでハヤシライスのような濃い色合いをしたルーからは、スパイスの芳しい香りが立ち、空腹を刺激する。

我慢しきれなくなり、あらかじめ用意してある飯を盛った皿にル

ーをかけ、テーブルにもって行く。テーブルには牛乳パックやガラスのコップ、スプーンが置かれている。

きつい、とか言いつつ楽しみにしている自分が否定できなかった。なぜなら、このカレーは――。

「いただきます」

と言い、一口パクつと食べる。途端に、カレーの旨味と辛味のハーモニーが口一杯に広まった。

――目を追うごとに味が変化する。

恐らく、具材の旨味がルーに溶けているんだろう。どんどんまろやかな味になって来ている。元々、俺が好きな辛めでコクのある味わいなのもそれに拍車をかけていた。

ビーフシチュー、とまでは言わないがやわらかい牛肉を口の中で味わい。日に日に甘くなっていく野菜を口に放り込みながら考える。

「あいつは何で料理人じゃなくて、デザイナーを目指してんだろ……？」

*

二人はそれぞれの所でそれぞれのカレーを食べ、最後の一口を口の中へ運び、よく噛んで味わった。

「ごちそう様でした」

「ごちそうさん」

それぞれの夜は更けていく。

（後書き）

初投稿です。

よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4669f/>

冷めたカレー

2010年10月8日15時04分発行